The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「サフラジェット」の記憶を読む : ジーン・リース初期と後期の2作品から
Author(s)	堀内, 真由美
Citation	パブリック・ヒストリー. 2017, 14, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public, **14** (2017), pp. 17-32 ©2017 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Recalling Suffragettes: The Women's Movement and Feminism in Two Works of Jean Rhys
Mayumi HORIUCHI

「サフラジェット」の記憶を読む

ジーン・リース初期と後期の 2 作品から

堀内真由美

はじめに——本稿の目的

ジーン・リース（Jean Rhys 1890-1979）は、旧英領西インド諸島ドミニカ出身のクリオール作家である。[(1)] シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』（1847）に登場するジャマイカ生まれの「狂ったロチェスター夫人」を主人公にした *Wide Sargasso Sea*（1966）で一躍注目されるようになった。筆者は本誌 12 号において、「植民地生まれの白人」、「奴隷主の子孫」というリースの出自にからめて、その作品をポストコロニアル文学と分類する一方、リース自身の政治的・歴史的問題意識は希薄だったとする評価に対し、批判的検証を行なった。その際、1962 年に発表された短編 'Let Them Call It Jazz'（以下「ジャズ」と記す）に注目し、リースが作品に 50 年代イギリス社会の「人種」問題を描いたことを示した。[(2)]

リースは多数の作品を通して、奴隷制の歴史、白人クリオールの存在、植民地における「人種」とジェンダー関係、本国イギリスにおける西インド移民の状況に至るまで、イギリス人が忘れ去ろうとしている過去や知ろうともしなかった事実を喚起させてきた。[(3)] 今回は、20 世紀初頭から第一次世界大戦前夜までの短期間に「過激」な女性参政権運動を展開した「サフラジェット」を、リースが自作品でどのように描いたのかを検証する。ドミニカから「本国イギリス」にやってきた 17 歳から 20 歳代はじめまでの失意の日々と、「サフラジェットの時代」とはぴたりと重なっている。しかし、後述するように、リース自身のフェミニズムや女性運動への認識に言及したものはあるものの、リース作品とサフラジェットとの関係に注目した評論は見当たらない。

今回取り上げる作品は、リース初期の長編 *Voyage in the Dark*（1934 年、以下 *VD* と記す）と、前稿でも考察対象とした「ジャズ」である。*VD* は、後述のように 1910 年から 14 年頃までのリー

(1) 「クリオール」は、本稿では、英領西インド諸島における奴隷解放令が本国議会を通過する 1832 年以前に、島々に居住していたイギリス系白人の子孫を指すものとする。

(2) 堀内真由美「「植民地主義の再発見」——ジーン・リースの描くノッティンヒル「人種暴動」」、『パブリック・ヒストリー』、第 12 号、大阪大学西洋史学研究室、2015 年、29-45 頁。

(3) 堀内真由美「英領西インド・白人クリオールの「植民地責任」——ジーン・リースと作品から」、『愛知教育大学研究報告』、第 63 輯（人文・社会科学編）、2014 年、73-81 頁を参照。

ス自身の生活を綴ったメモがもとになって創作されている。年代でいえば、最もサフラジェットの時代に近い作品である。他方「ジャズ」は、1949 年頃から書き始められたものだが、サフラジェットへの共感が創作動機となったことが、リースの手紙から伺い知れる作品である。この 2 作品を考察対象とし、さらに歴史的事実と照合するため、同時代の新聞、同時代の女性の状況をめぐる論考、サフラジェットの時代に注目した現代の特集記事などを参考として、物語に描かれたサフラジェットとその時代を検証していく。なお、当時の新聞に関しては、唯一の全国紙であり、それゆえリースが読んだ可能性の最も高い『タイムズ』紙を資料とする。

それぞれの作品におけるサフラジェットの記憶を、実際に起こったサフラジェット関連の事件とともに、登場人物でもある同時代の女たちが直面した社会の現実とも照合させながら、解き明かしていく。まず、リースのフェミニズムや女性運動への認識について、これまで交わされてきた議論を概観したあと、「ジャズ」における考察から始め、次に今回初めて取り上げる *VD* の紹介と分析を経て、最後に再び「ジャズ」に戻る。この手順によって、作品にサフラジェットを描き込んだリースの意図にも迫りたい。

1 「意識的ノン・フェミニスト作家による無意識のフェミニズム」

リース作品の多くが「自伝的」だと認識されているのは、1985 年と 90 年に刊行されたキャロル・アンジェによる 2 冊の評伝の影響が大きい[(4)]。とくに後者は 700 頁を超える大部の書物で、作品紹介のみならず、個々の作品の創作活動期にリースの周辺で起こった出来事が詳細に示される。本人の残した書簡やメモのほか、担当編集者、知人、肉親ほか関係者たちの証言を多数採用することで、「リース個人と作品との関係性」に説得力を与えることに成功している。アンジェは、リースが、白人クリオール女性を中心とした女たちの物語を共感的に描いたと評する一方で、リース自身のフェミニズムへの認識については、必ずしも共感的ではなかったとし、自作品への「フェミニスト批評」をリースは「笑って破り捨てた」と解説している[(5)]。

本人の死亡と同時に未完のまま 79 年に出版された自叙伝も[(6)]、リース研究者たちの参考資料となっている。この自叙伝は、衰弱のため、すでにペンを持てる状態ではなかったリースの話を聞き書きしたものである。ほぼ全編にわたる作業を担当したデイヴィッド・プラントは、リースの思い出を綴る中で、「ウーマン・リブにはあまり賛同できない。まったく嫌いというわけではないけれど、私は女たちを信頼しているわけでもないから」という彼女の言葉を引いている[(7)]。77 年ごろのリースの「ウーマン・リブ」へのこのコメントは、評伝作家アンジェのリース評とも重なる。

80 年代から増加するリース作品へのフェミニスト批評のなかで、90 年に発表されたパウラ・

(4) Angier, C., *Jean Rhys*, Penguin Books, 1985; Angier, C., *Jean Rhys: Life and Work*, Little, Brown and Company, 1990.

(5) Angier (1985), *op. cit.*, pp. 119-121.

(6) Rhys, J., *Smile Please: An Unfinished Autobiography*, Penguin Books, 1981 (first published by André Deutsch, 1979).

(7) Plante, D., *Difficult Women: A Memoir of Three*, E. P. Dutton, 1984, p. 40.

ル・ギャレによる批評は、他と趣を異にしている。ル・ギャレは、作品の自伝的要素を強調するあまり、登場人物たちから抽出される、本国と植民地の間を力なく漂う「消極的な犠牲者」としてのクリオール女性像を、リース自身の本質であるかのように理解する傾向を批判する。[8] その根拠として、リースが自分を語る際、ある時は定着したリース像を肯定するかのように語り、別の機会ではそのイメージを全面的に否定していることを挙げる。「これまで犠牲者とか消極的な人間だというふうにされてきたけれど、実際、私は活発な人間」。「人生で恋愛が終わった理由は、たいてい自分で終わりにしたいと思ったからか、恋愛したその場所から離れたかったからか、単にもう縛られるのがいやだったから」。『ヴォーグ』誌での最晩年のインタヴューを引用し、ル・ギャレは、本人と登場人物とをいったん切り離し、改めてリースが作品の登場人物に何を込めたかを問うべきだと主張する。他方でル・ギャレは、リースの「ウーマン・リブ観」には疑問をはさむことなく、「意識的にノン・フェミニストであった作家による無意識のフェミニズムを明らかにすること」を提唱する。[9]

1970 年代「ウーマン・リブ」勃興の時代を経て、80 年代から顕著になったリース作品へのフェミニスト批評は、作品と作者との内面的な関係を重要視するか否かの違いはあるにせよ、生前のことばを根拠に、リースを「ノン・フェミニスト作家」だと見なしている。やはり生前の言動から、「人種問題」へのリース自身の認識を重要視しなかったポストコロニアル批評と同じ傾向がうかがえる。加えて、リースが人生で遭遇した女性運動が「ウーマン・リブ」だけだったかのように論じられているのも特徴的だ。1890 年に生まれ 1907 年に「本国」にやってきて 19 年にオランダへ渡るまでの 10 代後半から 20 代を通したリースの人生と、「過激化」するイギリス女性参政権運動の時期が重なっているという事実は、無視しえない点ではないだろうか。

本稿では、これまでのフェミニスト批評において注目されてこなかった、「過激派」サフラジェットがいた女性参政権運動の時代を、リースの物語と登場人物のなかから考察する。そのことは、ル・ギャレの言う、リースの「無意識のフェミニズム」を検証することと同時に、作品から読者が学ぶべき歴史的事実と記憶の一例を引きだすことでもある。

2 「ジャズ」が喚起するサフラジェットの記憶

「ジャズ」を取り上げた前稿で、筆者は同時代に起こったノッティンヒル「人種暴動」との関連を中心に、リースが作品を通して「植民地主義の再発見」を行なったことを検証した。「作品に人種問題を盛り込むつもりはない」と予防線を張りつつ、[10] 主人公の「カラード女性」セリーナが体験した西インド人移民への差別と排斥を、リースは実際の「暴動」に一切触れることなしに、事件のルポルタージュだったということに読者が気づかされる、そのよ

(8) Le Gallez, P., *The Rhys Woman*, Macmillan Press, 1990, p. 2.

(9) *Ibid.*, p. 8.

(10) Rhys, J.(selected by Wyndham, F. & Melly, D.), *Letters 1931-1966*, Penguin Books, 1985 (first published by André Deutsch, 1984), p. 202 (To Francis Wyndham, May 23th, 1961).

うな描き方をした。同じように、今回筆者が注目する「ウーマン・リブに賛同しない」と公言したリースのフェミニズムについても、「ジャズ」にはそれと気づかされる描写がある。

それは、主人公セリーナが、彼女を「カラードのタート」（tart: アバズレ、売春婦）と見なして執拗に侮蔑する隣人の家に投石し、ホロウェイ刑務所に収監された直後に起こる。身体検査の後、職員たちはセリーナを「怖がらせようとしたがうまく行かなかった」。というのも彼女は「心を石のように堅くして何も感じないようにしていた」からだ。ほかの女性入所者たちと、最上階の踊り場から階段を降りながら、セリーナは「片側の手すりがとても低くなっているので簡単に飛び超えられる」と気づく。「下の方に見える灰色の石の廊下が待ち構えているように思えた」次の瞬間、セリーナは女性所員に「何をするの」と腕をつかまれていた。[11]「お針子」としてやって来た「本国」で「タート」だと排除され、抵抗したあげく刑務所に連行されたセリーナの絶望が、自殺未遂を誘発したと読める場面だ。

この場面が、一人のサフラジェットの行動を想起させる。1913 年 6 月 4 日、ロンドン郊外エプサムで開催されたダービー競馬で、国王所有の馬の前に走り出たサフラジェットが衝突の際のけがで後日死亡する。事件の第一報で『タイムズ』[12]は、当事者エミリー・デイヴィソンについて以下のような活動歴を列挙する。1906 年にエメリン・パンクハーストが結成した「女性社会政治連合」（Women's Social and Political Union, 以下 WSPU と記す）に参加。09 年には妨害活動で禁固 2 か月の判決を受けたがハンガーストライキの末、釈放。その直後、ラドクリフでの投石で「苦役つき収監」。抗議のハンガーストライキをしたが当局から「強制食餌」を受けると同時に「放水」にも見舞われる。このときは 8 日間の拘束の末、釈放。10 年 11 月、国会下院内で窓ガラスを割り 1 か月の禁固刑を言い渡されるが、ハンガーストライキの末、8 日間で釈放。11 年 12 月、ウェストミンスターの郵便ポストに火をつけたかどで禁固 6 か月。12 年 11 月には、スコットランドのアバディーンで、ロイド・ジョージだと勘違いしたバプテスト派の聖職者を攻撃しようとしたとして、10 日間の禁固を下されるが 4 日早く釈放。

事件第一報にはなかったデイヴィソンのもう一つの活動歴が、ホロウェイ刑務所内での「自殺未遂事件」である。事件から 100 年を記念する『インディペンデント』紙の特集記事によれば、[13]郵便ポスト放火の罪で 6 か月の禁固を言い渡され収監されたデイヴィソンが、「強制食餌」への抗議として階段の手すりを乗り越えたが、途中張られた金属線の網にひっかかり助かった。「自殺未遂」までして抵抗を示した「強制食餌」（force feeding）について、少なくともこれまでの女性運動通史からは、その実態は十分に伝わってこない。最近では、2010 年に BBC 編集によるウェブサイト 'A History of London: Suffragette City' で、それがいかに残酷なものだったか

(11) Rhys, J., 'Let Them Call It Jazz', in *Tigers are Better-Looking with a Selection from The Left Bank*, Penguin Books, 1972(first published by André Deutsch, 1968), pp. 170-171.

(12) 'The Suffragist Scene: His Majesty's Jockey Injured', *The Times* (Microfilm Edition of *the London Times* produced by Research Publication INC.), 05/June/1913.

(13) 'Profile: Emily Wilding Davison', by Rebecca Myers, *The Independent*, 28/May/2013, http://www.independent.co.uk/news/uk/home-news/profile-emily-wilding-davison-86. (24/06/2016 閲覧)

を解説している[14]し、15 年秋にイギリスで公開された映画『サフラジェット』（原題 *Suffragette*, 2016 年 8 月現在、日本公開は未定）の中でも、その凄惨さが描かれている[15]。顔、肩、腕、ひざを数人がかりで押さえつけ、「ブランデーと、ミルクまたは生卵との混合物で満たした漏斗」をゴム製チューブの端にセットし、チューブのもう一方をサフラジェットの口から喉に挿管する。政治犯としての処遇が拒否されると、彼女たちはしばしばハンガーストライキを決行したが、「強制食餌」は彼女たちの抵抗へのさらなる対抗処置であり、栄養を与えるどころか、その過酷さでサフラジェットの闘志を挫く目的があった[16]。

「デイヴィソン自殺未遂事件」を想起させる場面を、リースが「ジャズ」に意図的に挿入したのか、確証はない。だが、主人公がホロウェイ刑務所に収監された直後の、最も絶望した状態で起こした「行動」として描かれたことを考えると、創作のきっかけとなったリース自身の体験とそれが彼女に与えた影響の大きさが、サフラジェットを作品に甦らせたと思われるのだ。

3 「ホロウェイ刑務所」に至る道筋

リースは、1927 年のイギリスへの「再帰国」以来、作家活動を支えてくれた夫レスリーを 45 年に亡くす。その後、心神喪失となった彼女を励ましてくれたのが亡夫のいとこにあたるマックスで、妻帯者であった彼の離婚成立後、47 年に 2 人は再婚する。自宅を改築し、前妻への生活費の支払いも負うことになったマックスは、しだいに手段を選ばぬ金策に走りだす。金融街シティで詐欺まがいの商売に手を染めていることに気づき、リースは不安と夫との口論から心のバランスを崩していく。ウツとアルコール依存による「異変」が顕著になった 48 年春、リースは煉瓦を投げつけ隣家の窓ガラスを割り 5 ポンドの罰金を命じられる。同年の秋、増収入を図って自宅の一部を貸し出していた夫妻のもとに間借り人が入居するが、リースは、物音に執筆を邪魔されたと腹を立て、入居者男性の顔を殴ってしまう。さらに彼が警察を呼んだことに激怒し、「汚らわしいゲシュタポめ」と叫んで警官を殴る。その場で逮捕され裁判にかけられるが、裁判の合間にも近隣や間借り人との間にトラブルを繰り返す。精神分析の必要を感じた裁判所の命により、リースは翌 49 年 6 月までの間に少なくとも 5 日間、ロンドン郊外ホロウェイ女子刑務所病院に収監された[17]。

ホロウェイ刑務所収監についてリース自身が言及したものとして、1949 年 10 月に旧知の友人ペギー・カーコルディ宛てに書いた手紙がある。リースはこの時期、のちの *Wide Sargasso Sea* となる作品にすでにとりかかっていたのだが、この一件ですっかり「書くことのエネルギーが失われてしまった」と嘆き、そしてホロウェイ監獄の様子を伝える。

---

(14) 'A History of London: Suffragette City', BBC, 13/May/2010, http://news.bbc.co.uk/local/london/hi/people_and_places/history/newsid_8680000. (24/06/2016 閲覧)

(15) *Suffragette* (DVD), Universal Studios Entertainment. Com, 2015.

(16) BBC, op. cit.

(17) Angier (1990), *op. cit.*, pp. 439-447.

それはとても巨大な建物でした。私が体験したのは短い時間だったにもかかわらず、それが邪悪で無用の建物だということは、はっきりと言えます。それはみんなを痛めつけるだけのものです。（略）女医については、私を怖がらせたという以外に、何も知りません（若かったか、中年だったか、いずれにせよ年寄ではなかったですが）。大きなギラッと光るメガネをかけ、鋭い歯を見せて、私に微笑みかけてきたのです。（略）かれらはすべて約束します。毛布をもう一枚よけいに頼んでも、睡眠薬を頼んでも。しかし実行されたことはありません。このことに気づくまでに数日かかります。(18)

手紙では、リースの出所後に刑務所内で発生した「事件」の報道ぶりについても言及している。新聞報道は「所内の騒ぎを過少に伝えており」、「ひどい記事」では、刑務所長が「人間的だ」とさえ書いているという。この「騒ぎ」とは、刑務所での食事に対して女囚たちが起こしたもののようだ。それに続く記述は、リースの人種主義的な表現も含めて注目に値する。

（刑務所長は）人間的などではありません。ずんぐりした中国人のようです。彼女は偽りの上品な声でここを「私の刑務所」と呼ぶのです。自己満足以外の何物でもありません。「私の刑務所」ですって、あの苦痛の船が！（略）ああ、神よ、なぜあの建物が爆破されなかったのでしょう。不幸な囚人が半分死にかけたハエのように這いつくばっているのを見たなら、私がそのさまをどんなふうに感じたかわかるでしょう。私はつくづくサフラジェットたちのことを思いました。これが、彼女たちの犠牲の結果なのかと。(19)

リースは、1910年代からホロウェイへの収監数が急増するサフラジェットたちに思いを馳せた。投石、警官への暴力というリース自身によって形作られた「ホロウェイへの道」が、サフラジェットの当時新聞で報じられた行動と重なるのは、単に偶然の一致とは言えまい。リースのなかに長く蓄積されてきたサフラジェットの記憶があり、あるとき自分の行動とサフラジェットの過去の行動とが結びつけられたとは考えられないか。初めてイギリスにやって来た頃、リースはサフラジェットの存在を認識したはずだ。時を経て再び物語に描かれたサフラジェットだが、その最初の物語への登場は、どのようなものだったのだろうか。

4　*Voyage in the Dark*——クリオール少女とサフラジェットとの接点

(1)　あらすじ

イギリスにきて2年になる18歳のコーラスガール、アンナは、巡業先で年上の紳士ウォルターと知り合う。ある日家主から退去を命じられたアンナはウォルターに助けを求め、それ以来、

(18)　Rhys, *Letters*, pp. 55-56 (To Peggy Kirkaldy, October 4th, 1949).
(19)　*Ibid.*, p. 56.

ウォルターが彼女のために借りた部屋に移る。19 歳になった春、ヨークシャーから義母ヘスターが会いに来る。今後の経済的支援を辞退するアンナに、ヘスターはその理由を悟るが、自分にはアンナの「稼げる行為」を止めさせることはできないと告げ去っていく。初夏のある週末、郊外に滞在していた 2 人に、ウォルターのいとこヴィンセントと「恋人」ジャーメインが合流する。ジャーメインは、イギリス人男性の女性への侮蔑的態度を批判する。出会って 1 年になる頃、別れの手紙と 20 ポンドの小切手が届く。別れを撤回させようとするが、ウォルターが自分を避けたがっていることを理解し、決別する。

街はずれの一室に移ってきたアンナを、上階の、「正看護婦」と自称する女性エセルが訪れる。「スウェーデン・マッサージ師」の資格も持ち高級街にフラットを所有しているというエセルは、一緒にマニキュア施術の仕事をしようとアンナを誘う。ある日、コーラスガール仲間だったローリーと再会する。恋人に捨てられたと告白するアンナに、ローリーはアメリカ人カールを勧める。翌月アンナは、「マニキュアの仕事」を手伝うこととアンナの「客」を紹介することを引き換えに家賃を値引くという条件で、エセルのフラットに移る。同業者が「いかに警察沙汰にしないで若い女たちを使ってうまくやっているか」、「マニキュアを男性客にどう施すか」を教わるが、「施術以上」を要求する客を拒否するアンナの役立たずぶりにエセルは怒る。カールとの関係はしばらく続くが、妻子がいることを告げ彼は去る。その後アンナは行きずりの男を連れ込むようになる。あるとき男とダンスをしていたアンナは、部屋に飾られた絵画を破損させ、男に暴力をふるった後、倒れる。

ローリーがエセルからの密告状を受け取る。アンナが部屋代を滞納したうえ、エセル所有の器物を破損したこと、父親のわからない子を妊娠したと告げに来たこと、苦情を言うと出て行ったことが綴られていた。1914 年 3 月 26 日と記されたその手紙をローリーはアンナに見せ、ウォルターに助けてもらうべきだと助言する。ヴィンセントが来て、中絶費用 40 ポンドを用意すると約束する。医院の処置室で故郷西インドの夢を見る。薄らぐ意識の中で「またすべてが始まろうとしている」とアンナは思う。

(2)　主人公アンナとリースの「共通体験」

1934 年にコンスタブル社から出版された *VD* は、現在、「ペンギン・クラシクス」シリーズの一冊として入手できる。評伝作家キャロル・アンジェによるイントロダクションによれば、33 年完成時点では *Two Tunes* というタイトルで、原稿を読んだコンスタブルの編集者が、中絶手術でアンナが命を落とすという結末を変更するよう要求したことが紹介されている。[(20)] リース評論家のエレイン・セイヴォリも原題に言及し、「主人公アンナのふるさとであるカリブ海世界と、現在の不幸なアンナが置かれているイングランドという、まったく別々の相対立する世界」を表わしていると解釈している。[(21)] また、2014 年に出版された最新のリース作品論でア

(20)　Rhys, J., *Voyage in the Dark with an Introduction by Carol Angier*, Penguin Books, 2000, p. vii.

(21)　Savory, E., *Jean Rhys*, Cambridge Univ. Press, 1998, p. 89.

ンナ・スナイスは、修正後のタイトルの意味に触れて、「アンナの航海 (voyage) は、彼女をどこにも連れて行ってはくれず、つねに出発地点に連れ戻す」と評する。[22]

VD も自伝的であるとされる根拠に、リースとアンナの「共通体験」がある。リースは 17 歳になる 1907 年 8 月、父方の伯母に連れられ故郷ドミニカから「本国」にやって来る。ケンブリッジの名門女学校に編入し、当時の大学進学へのパスポートである「ケンブリッジ地方試験上級」に合格したが進学はせず、女優を志す。09 年に正統派舞台俳優を養成する「アカデミー・オブ・ドラマティックアート」に入学するが、「英語のなまり」が原因で一年足らずで退学する。ほどなくロンドンでコーラス団に加入し、翌 10 年にかけて地方巡業をしていた頃、20 ほど年上の「金融ジェントルマン」と知り合う。しかし 2 人の関係は 1 年あまりで終わり、その後の複数男性との「性とカネのこそこそした交換」の果て、[23]「父親不明」の妊娠と中絶を経験する。*VD* は、リースが彼との破局の哀しみを綴ったノートが下敷きになっている。[24]

アンジェは、*VD* における手法を「少ない言葉の背後に意味を置くこと」だと説明し、[25] リースはその意味を理解するためのヒントを与えているという。一例として挙げられた、アンナがエミール・ゾラの『ナナ』を読んでいる場面では、「男が娼婦について書いているものはウソだらけ」というコーラスガール仲間のコメントが挿入されるだけで、アンナの反応は何も書かれていない。[26] セイヴォリもアンナが『ナナ』を読む場面に注目する。セイヴォリは、『ナナ』の主人公で、舞台女優にして娼婦であるナナを、作者ゾラは強烈な女嫌い（ミソジニー）の心情から、「高貴な男性を破滅させる不遜な者」として描き、「その罰として若さの絶頂で死ぬという創作をした」と解説する。このようなナナの描かれ方を意識して、リースが *VD* の修正前の結末を創作し、売春に対する「罰」としてではなく、アンナを苦痛と絶望から救済するため若さの絶頂で死なせたとセイヴォリは解釈している。[27]

ところで、*VD* の結末をめぐっては、リース自身は当初、修正を頑なに拒んでいた。修正に応じれば「作品の目的がなくなってしまう」と当時の友人への手紙で訴えている。[28] 原稿を書き上げた段階のリースにとって、作品は、「アンナの死」、それもセイヴォリの解釈とは異なる「苦痛と絶望の末の死」でなければ完結しえないものだったようだ。*VD* におけるこれまでの主だった解説では、リースの自伝的要素と『ナナ』との関連が取り上げられてきたが、本稿では、リースがこだわった「当初の結末」の意味も念頭に、物語の中の女たちの歴史を探っていく。

(3) 「もぐりの女たち」――ナナとアンナを取り巻く社会

これまでの評論で指摘された *VD* と『ナナ』との関連性に加えて注目すべきは、物語の背景

---

(22) Snaith, A., *Modernist Voyages: Colonial Women Writers in London, 1890-1945*, Cambridge Univ. Press, 2014, p. 136.

(23) Angier (1990), *op. cit.*, p. 73.

(24) *Ibid.*, pp. 78-80.

(25) Rhys, *Voyage in the Dark*, p. ix.

(26) *Ibid.*, p. 9.

(27) Savory, *op. cit.*, pp. 92-93.

(28) Rhys, *Letters,* pp. 24-25 (To Evelyn Scott, June 10th, 1934).

となった時代や場所の違いにもかかわらず、2 人の主人公ナナとアンナの境遇に、女性が無権利状態に置かれていた歴史が浮かび上がってくる点である。ナナ、アンナとも 18 歳からのおよそ 1 年半が作品に描かれ、片やヴァラエティ劇場の「女優」、片や「女優」たちを支えるコーラスガールであり、2 人とも生活を保証してくれる「相手」ができるとその仕事から一時的に抜ける。これら共通点を下敷きにし、リースはナナの描かれ方に対する批判的なまなざしを *VD* に投影したと考えられる。

ゾラは、ナナの絶頂期の暮らしを、「同じ単調な時間の繰り返しで、だらだらと所在なく過ぎて行った」と書き、さらに「食わせてだけは貰えるという安心から、淫売婦という職業に閉じこもり、修道院のような無為と服従の底に、何の努力もせずに、惰眠を貪っていた」と揶揄しているが、[29] *VD* では、恋人ウォルターのいとこヴィンセントがアンナを評価する。アンナが、ウォルターの用意した住居に移動し、彼の自宅との往復をするだけの生活を始めた頃、ヴィンセントは「自分から何もしない」アンナに、歌のレッスンを受けるよう勧めにやって来る。数か月後にも、「ほとんど読書しない」と言うアンナに、ヴィンセントは「一日何をして過ごしているの」と責めたように尋ねる。このとき「あなたのことが嫌い」と心でつぶやいたアンナはヴィンセントに返事をしていない。[30] 最後は、ヴィンセントによって代筆された「ウォルターからの別れの手紙」の一節である。

> 君はまだ若い。目の前にはたくさんの幸福がある。（略）若いのだから、本ももっと読むべきだ。（略）もし君が懸命に精進すれば、生きていけない理由なんてない。私はそのようにいつも言ってきたし、今もそう思っている。[31]

植民地から帝都に放り出されたアンナの願いは「ただウォルターと会えればいい」という単純なものだった。そのアンナに自助努力を促すヴィンセントの助言と励ましは、残念ながら役に立たなかった。読者は、「ナナの時代」から変わらない「アンナたち」の境遇に突き当たる。

ナナが生きた 19 世紀後半、イギリスにおける売春統制を論じた田村俊行によれば、[32] ジョセフィン・バトラーらフェミニストの反対運動にも関わらず成立した伝染病法 (1864) は、売春「専業」の女たちにとってだけでなく、「もぐりの (clandestine) 女たち」にとっても脅威となった。この法律によって、市民からの情報をもとに売春婦を特定し、治安判事の命によって医師の検診を受けさせることができるようになった。罹患の診断が出れば最長 3 か月の入院が義務化されるに及んで、売春の法的定義のあいまいさもあり、「女という身体を持つ者であれば誰

(29) エミール・ゾラ（川口・古賀 訳）『ナナ』、新潮社（新潮文庫）、2013 年、478 頁。

(30) Rhys, *Voyage in the Dark*, p. 74.

(31) *Ibid.*, pp. 79- 80.

(32) 田村俊行、「19 世紀イギリスの売春統制――伝染病法の制定過程と「臣民の自由」」、『史苑』第 72 巻、第 2 号、立教大学史学会、2012 年、37-58 頁。

であれ売春婦というラベルを貼られる危険性」が出てきた。[33] 伝染病法をめぐっては、当初「フランス式」を採用する声が大きかった。パリの売春婦は自由意志もしくは現場を抑えられることで強制的に警察に登録され、自営売春婦となるか、警察に登録された経営者に雇用されるかを選択した。『ナナ』には、複数の富裕な男性から生活を保障してもらいつつ、浪費でかさんだ借金返済のため、ナナが時折「仕事」をこなす場面や、警察のターゲットであった「お針子」と一緒にいたナナが、急いでホテルから逃げ出す場面もある。[34]「人気女優」も「お針子」同様、「もぐりの女」だったのだ。

結局、イギリスは「フランス式」を採用しなかったが、女性にのみ課される強制的検査と最長 1 年に伸びた入院期間への反発が強まり、伝染病法は 1886 年に廃止される。その後も売春と性病の流行は社会問題であり続けたが、アンナの時代、1910 年代前半に『タイムズ』に掲載された売春関連記事を索引で探そうとしても、'prostitute' や 'prostitution' という項目は見当たらない。「性病」を示す 'venereal diseases' や暗に売春を示す「悪徳」'evil' という項目で突き当たる記事には、当事者である女たちの境遇に触れたものはほとんどない。[35] 関連記事に見られる変化といえば、13 年 8 月に、それまで使用されていた 'venereal diseases' に 'sexual diseases' という新語が加わったこと、[36] 同年 10 月に性病に関する調査報告を担う王立委員会（the Royal Commission on Venereal Disease）が発足したことだ。[37] このときの委員の一人が編んだ *Sexual Problems of To-Day* は、[38] アンナたちの実態を知る手がかりを提供してくれる。

編者のメアリー・スカーリーブはイギリスにおける女性内科医の先駆者であり、前述の王立委員会委員を設立当初の 1913 年から 16 年まで務めた。「売春」と題された第 7 章を執筆担当したヘンリー・E・ハーディーは英国国教会牧師で、ロンドンのイーストエンドで貧民への奉仕活動に専心した人物である。この章でハーディーは、売春婦の出身について、ミュンヘンにおける実態を警察統計から紹介している。多い順に、女中、ウェイトレス、女工、お針子、舞台関連従事者、洗濯婦、その他として「画家のモデル」が挙げられ、警察に報告されたのは専業ではない「もぐりのタイプ」だった。パリでもミュンヘン同様、「もぐりの売春婦」(clandestine prostitutes) と呼ばれた女たちが目立った。性病の流行を食い止めるには、「罹患していることに無自覚な売春婦たち」の把握が必要だが、「彼女たちの多くは、実際していることの隠れ蓑として、別の仕事をしているふりを装っていた」ゆえに、実態の把握は困難だ。[39]

興味深いのは、当時のロンドンでの「もぐりの女たち」を取り巻く環境である。「最初の男に捨てられたら次に移り」、「もぐりの女から街の女へと流れていく」。この様子を「偉大なフ

---

(33) 田村、前掲論文、38 頁。

(34) エミール・ゾラ、前掲書、59-70 頁、410-411 頁。

(35) 1910 年から第一次世界大戦開戦直前 1914 年 7 月までの『タイムズ』マイクロフィルム版で、今回筆者が確認できた「売春」関連記事数は、1910 年 1 件、1911 年 3 件、1912 年 1 件、1913 年 13 件、1914 年 10 件だった。

(36) 'Venereal Diseases: Dr. Johnstone's Official Report', *The Times*, 16/Aug/1913.

(37) 'Royal Commission on Syphilis: Choice of a Chairman', *The Times*, 25/Oct/1913.

(38) Scharlieb, M.(ed.), *Sexual Problems of To-Day*, Williams and Norgate, 1924.

(39) *Ibid.*, pp. 223-224.

ランス人リアリスト、ゾラ」の作品を例にとり、ハーディーは「フィクションよりも事実の方が悲惨である」と喝破する。[40] また、「カモフラージュされた広告」に注視することも、売春防止に重要だとして具体例を挙げている。それらは「安い週刊紙」に掲載されており、「次の週にはもう消えているような類の広告」である。掲載された売春宿はすべて「ヘイマーケット地区で女性が運営している施設」で、「リージェント・ストリートからボンド・ストリートを練り歩くサンドイッチマンも宣伝しているかもしれない」。

- 「ハンド＆ネイルのお手入れ、ミス……。パリから来英した専門家が助手を務めます。営業時間は 12 時から 7 時。3 か国語可能。助手求む。」
- 「慢性筋肉疾患に電気療法。看護婦募集。連絡は……へ。12 時から 3 時まで。」
- 「フランス婦人が改装した美装物件に入居者募集。連絡はマダム……、ビル脇の入り口から。併せて助手も募集。」[41]

ハーディーが列挙した広告内容は、アンナを「ビジネス」に誘ったエセルの肩書や「仕事」と一致する。「舞台女優」も「コーラスガール」も、後ろ盾をもたない若い女性には、いつでも「もぐりの女たち」へと組み込まれる環境があった。しかし、広告の標的となる若いアンナたちに、ハーディーの警告が届いたとは思えない。彼女たちが自らの境遇に疑問を抱かない限り、「もぐりの女たち」は名称や形態を変えながら存在し続けることになる。

(4)　アンナが「サフラジェット」になるとき

VD では、アンナが自分の境遇を客観的にとらえ、自分を取り巻く男性中心社会のありようを徐々に理解していく過程が描かれている。物語の冒頭で、アンナはコーラス団の一員として巡業先のブライトンに滞在している。間借りしている部屋は、「商売女（professional）に部屋を貸すこと」を渋った女主人を、「すでにあらゆることを経験してきた」とアンナが賞賛する同僚モーディーが、うまくとりなして借りたものだった。[42] それでも家主は、午後遅く寝間着のまま階下に降りてくるモーディーに、「居間の窓越しに半裸のような姿をさらされたら、この家の評判が悪くなる」と文句をつけた。18 歳の「新入り」アンナは、まだこの 2 人のやりとりと、「コーラスガール」である自分との関係がつかめていない。

ロンドンに戻ったアンナは、ウォルターとの再会の席で「あの場所にいつも居るのか」と尋ねられる。彼女のロンドンでの住所 Judd Street は実在の通り名だ。大英博物館から図書館部分が移転・新築され、ユーロスターの発着で賑わう「洒落たエリア」となる以前、Judd Street は麻薬の売人が徘徊し「売春婦」が住む地域として、筆者のような 1990 年代初頭の留学生も立ち入りに注意を促される場所の 1 つだった。その「場所」から、アンナは退去を通告される。

---

(40)　*Ibid.*, pp. 228-229.

(41)　*Ibid.*, pp. 231-232.

(42)　Rhys, *Voyage in the Dark*, p. 8.

「真夜中の出入りが頻繁なこと」を理由に持ち出した家主だったが、抗議するアンナに「この家にタートはいて欲しくない」と拒絶する。[43] 'professional' だという理由で部屋を貸し渋られてから数か月後、今度は 'tart' だとの理由で退去を命じられたアンナは、世間の自分への評価をはっきりと認識する。

さらに、「タート」を取り巻く男性社会への覚醒のきっかけとなったのは、郊外で過ごす週末にヴィンセントが連れてきた、「パリで知り合った半分フランス人」だというジャーメインの言動である。アンナとウォルターも同席した食事の際、ジャーメインが「自分のことを完璧だと思っている」ヴィンセントをからかう目的で、彼がシャンパンを飲む際「げっぷ」をした様子を真似して見せる。それをウォルターが「唇をすぼめ驚きの表情を浮かべて見つめる」。彼の反応を感知したジャーメインは、次のように言う。

> あの顔を見た？ヴィンセント、あなたもよくする顔よ。女をバカにした顔ね。この国ではとてもありふれた表情だけど。（略）お金をもらっても、イギリス女性にはなりたくないわ。

食事の後も、「あるフランス人男性が教えてくれたこと」だとしてジャーメインは語り続ける。

> 彼が言うことは正しかった。ここにはきれいな女の子はいるけれど、きれいな女性はいない。きれいな女の子がいてもぼんやりとして空虚。なんで？彼女たちに何が起こるの？そしてこれもまた真実。ここの女性は悲惨。疲れ果て男性にへつらった表情になるか、さもなければ冷酷で干からびたようにされてしまうか。邪悪なものにされてしまうのよ。彼女たちがなんでそうなるのか、理由は誰もが知っている。イギリス人男性が女性を気遣わないから。かれらは女性を幸せにはできない。ほんとうはそんなに女性のことが好きではないから。まあ、私には大して関係ないことだけれど。[44]

ウォルターに会うたびに性を交わしカネを与えられる以外、「別段何もすることがない」毎日を送っていたアンナにとって、ジャーメインの発言は驚きとともに、共感ももたらした。ジャーメインが席をはずした際、ウォルターとヴィンセントが彼女を批評するのを見聞きして、アンナは「そう言って見つめ合う 2 人に嫌悪を感じた」。[45] ジャーメインの挑発的態度の理由を、「要求した額のカネをヴィンセントがくれなかったから」と説明し、ジャーメインの美しさを褒めたアンナに「女性としてはトウが立っている。そのうち赤ら顔になるタイプだ」と断定するウォルターに対して、アンナは強い違和感を覚え反論する。[46]

それでもなお「ウォルターに会いたい」と思い続けるアンナに、ヴィンセントが代筆した「別

(43) *Ibid.*, p. 26.
(44) *Ibid.*, pp. 69-70.
(45) *Ibid.*, p. 71.
(46) *Ibid.*, p. 75.

れの手紙」とウォルターの態度が、決定的な変化をもたらす。別れを撤回させようとウォルターに会った際、「本も読まず一日何もしない」自分を見下していたヴィンセントが、自分からウォルターを遠ざけたがっていることに気づいていたアンナは、そのことをウォルターに訴える。しかし、ヴィンセントに代筆を頼んだのがウォルター自身であったこと、「彼は君の助けになりたいと思っている」とヴィンセントをかばうウォルターに、アンナは「別れの通告」が 2 人の紳士による「共犯」だと思い知る。「あなたの大切なヴィンセントにお伝えくださいな。どうかお構いなく、私はあなたの助けなどいらないと」[47]。タクシーの窓からアンナは毅然とウォルターに言い放つ。思いがけないアンナからの決別にウォルターは呆然とする。

ウォルターとの別離の後、アンナが初めて「男性社会」に暴力的態度を取るのは、エセルから役立たずと叱責され一人街をさまよい歩いた時だ。通りすがりに男が「彼らがいつもするように」声をかけてくる。アンナが殴ろうとしたら男は足早に去っていく。さらに「殴るつもりで追いかける」と、街角でアンナを見つめている警官に気づく。ひと月ほど前ローリーと夜道を歩いていたときにも、警官が 2 人を凝視していた。その時、警官に「ブタめ！」と罵ったローリーに「誰のこと？」と尋ねるほど[48]、アンナにはまだ「タート」にとって「警官」の存在の意味がわかっていない。しかしいまやアンナは、警官に「忌々しい奴」と嫌悪をむき出しにする[49]。さらにカールの裏切りの後、アンナは怒りを爆発させる。行きずりの、「腰に包帯を巻いた」男とアンナはダンスをしている。部屋に飾られた絵画の中の犬が「こちらをにらんでいるように思われた」アンナは、脱いだ靴を投げつける[50]。気分が悪くなり男の手を放そうとするが男はアンナを離さない。アンナは包帯を巻いた男の腰を蹴りとばす。

物語終盤に描かれた、アンナが靴を投げつけ絵を破損させる場面は、サフラジェットの起こした事件を連想させる、作中唯一の「ヒント」である。実際の事件は 1914 年 3 月 10 日に起きた。翌日の『タイムズ』は、1906 年からナショナルギャラリーに展示されているヴェラスケスの、通称「鏡の中のヴィーナス」が、メアリー・リチャードソンという女性によって「数秒間にわたって切り付けられた」と報じた[51]。取調室で彼女は、「パンクハースト夫人が痛めつけられていること」への復讐だったと説明した。リチャードソンのプロフィールは、ヘイスティングスの出版社が地元ゆかりの女性を紹介するサイトで読むことができる[52]。リチャードソンはカナダ国籍の「ミリタント・サフラジェット」の一人で、事件までの 2 年間で 9 回逮捕され、ハンガーストライキと強制食餌を経験する。馬車の踏み台に駆け上がり、国王ジョージ 5 世に請願書を差し出したこともある。13 年 6 月の「ダービー競馬事件」のエミリー・デイヴィソンと

(47) *Ibid.*, pp. 84-85.

(48) *Ibid.*, p. 110.

(49) *Ibid.*, p. 126.

(50) *Ibid.*, pp. 137-138.

(51) 'National Gallery Outrage: The Rokeby Venus', *The Times*, 11/Mar/1914, http://www.heretical.com/suffrage/1914tms2.html. (27/06/2016 閲覧)

(52) 'Mary 'Slasher' Richardson: Notorious militant retires to Hastings', http://www.hastingspress.co.uk/history/mary.html. (28/06/2016 閲覧)

当日も行動をともにしていたが、事件直後リチャードソンは何者かに顔を殴られ群衆に追いかけられたという。

VD で描かれたただ一つの「事件場面」の意味を考えるとき、それが、世間から軽んじられたクリオールの「タート」、アンナにとって、自分を貶める社会に初めて本気で怒りを表現するのにふさわしい行為だと、リースには思えたからではなかったか。

5　取り残されるアンナとセリーナ――「ジャズ」に回帰する「無意識のフェミニズム」

「暴力的行為」で記憶されるサフラジェットだが、彼女たちもまた、不当に女性を差別する社会に本気で怒りを表した人々だった。女性参政権をどの範囲で認めるかを超党派で議論する調停委員会が 1910 年 1 月の総選挙後結成され、しばらく低調だった女性参政権への注目度がにわかに高まる[53]。委員会による調停法案（the Conciliation Bill）の行方を、サフラジェットたちは「戦闘的行動」を控えて見守ったが、結局、法案は成らなかった。下院で第二読会へと進められたはずの法案を、自由党内閣首相ハーバート・H・アスキスが、会期中の審議の進行を拒否したためである。1910 年 11 月 19 日付の『タイムズ』は、「ウェストミンスターでの騒乱と逮捕」という見出しで前日の事件を報じている[54]。のちに「ブラック・フライデー」と呼ばれる出来事である。

記事によれば、10 年 11 月 18 日正午、WSPU のメンバーが議事堂の外に結集し、「女性参政権付与への議論がうやむやにされ、いたずらに審議が遅らされることに抗議する」という声明文を読み上げた。首相面会を求めてエメリン・パンクハーストを含む 20 名が第一陣として下院内に入って行く一方、その他大勢のメンバーが「法案を通せ」「首相の拒否権を無効に」などの横断幕を掲げ、議事堂外で大規模なデモンストレーションを行なった。「警官のなかには、職務遂行のため、女性たちをヘルメットで叩きながら払いのける者もいた」が、「全体として警察は平静さを保っていた」。「一人は足首を蹴られ、一人はベルトで顔を切り付けられ、一人は手に傷を負った」と、警官がサフラジェットから受けた「被害」が列挙されている。国会内に入った「先遣メンバー」は静かに待機していた。にもかかわらず議事堂外での抗議活動によって、およそ 200 名の逮捕者を出す事態となった。

映画『サフラジェット』公開直前に、BBC がネット配信した特集記事[55]は、事件翌日の『タイムズ』が報じなかった事実を教えてくれる。およそ 300 人のサフラジェットが、議事堂を包囲する警官の壁に阻まれ、蹴散らされることに抵抗したサフラジェットたちが「警官と男の野次馬によって暴行を受けた」。多くが「殴られ地面に倒された」と証言しており、この時 2 名の女性が死亡した。また別の証言では、彼女たちは、警官や野次馬から痴漢行為も受けていた。

---

(53)　Strachey, R., *The Cause: A Short History of the Women's Movement in Great Britain*, Virago, 1978 (first published by G. Bell & Sons, 1928), pp. 315-318.

(54)　'Suffrage Raiders: Disorderly Scenes and Arrests at Westminster', *The Times*, 19/Nov/1910.

(55)　' 'Suffrajitsu': How the suffragettes fought back using martial arts', by Camila Ruz & Justin Parkinson, *BBC News Magazine*, 05/Oct/2015, http://www.bbc.com/news/magazine-34425615. (24/06/2016 閲覧)

「ブラック・フライデー」以降、サフラジェットたちはこれらの被害に備えて、入念な準備と計画に基づいてデモを行なうようになったという。「過激派」の戦術の転換点ともなった「ブラック・フライデー」について、同時代人の女性史家レイ・ストレイチーは、その大部の女性運動通史のなかで、サフラジェットの死傷者も含め一語も言及していない。

「放水」や「強制食餌」のほかにもサフラジェットが受けた暴力が、その後の歴史で語り継がれてきたとは言い難い。リースは友人への手紙に、それらを全て含んで、「彼女たちの犠牲」と書いたのか、残念ながら文脈から読み取ることはできない。だが、「彼女たちの犠牲の結果」が、あの時代から 40 年以上経って、ホロウェイ刑務所で自分が見た現実だとしたら何が間違っていたのか、リースにこみ上げてきた怒りは想像できる。女囚を「鑑定」し「診断」する「女医」、高圧的な権力者でありながら「人間的な人物」としてマスコミの前ではふるまえる刑務所長。男性社会のルールを学んだ優秀な女性責任者たちの言動と、収監された女たちの悲惨な状態を目の当たりにしたリースは、それからさらに 10 年ほど後、編集者への手紙に「ホロウェイ監獄を題材にした短編を書いた」と、「ジャズ」草稿完成を知らせた。(56)

「サフラジェットの犠牲」をもってしても、社会から排除される女たちが後を絶たなかったことは明白だ。

> 単身でイギリスにやって来る若い女性や妊婦はとりわけ大きな壁にぶつかる。（略）単身で入国し頼れる友人や親せきにも会えず泊まる場所もない女性は、自分が搾取されることを知るだろう。プロの売春仲介人が地元の売春宿で人手を探している。「安い家具付きの部屋」がそのような建物の中にあるのだ。故郷の島から警告を受けてやって来ても、単身女性に見合う適当な仕事が不足していると、到着直後から、彼女をつまずかせてしまうことになる。(57)

引用文は、ノッティンヒル「人種暴動」の 2 年前、1956 年にフェビアン協会植民地局が出版した「フェビアン調査シリーズ」の一冊、*The West Indian in Britain* からのものである。冊子のもとになった書物には、共著者としてダグラス・マンリーも名を連ねている。ダグラスは、55 年の総選挙でジャマイカ主席大臣に就任したノーマン・マンリーの息子である。ダグラスら執筆者は、イギリスに渡る同胞のための情報収集に、6 週間に及ぶ 200 件以上の聞き取り調査と、西インド人が集まる公共施設、工場、かれらの居住地域などへの現地調査を実行した。それをもとに、雇用主、家主、地域住民ら「ホスト側」であるイギリス白人との関係を中心に、西インド移民への助言と警告を綴っている。そのなかで、「移民の中では少数である」と前置きしながらも、とりわけ独身女性に言及したのが上の「警告」である。

「クリオールのアンナ」は、*VD* 修正前の結末では死によってしか救済されなかった。だが、

(56) Rhys, *Letters*, p. 185 (To Francis Wyndham, May 31th, 1960).

(57) Senior, C. & Manley, D. (ed. by Mackenzie, N.), *The West Indian in Britain*, Fabian Colonial Bureau (Fabian Research Series 179), 1956, pp. 19-20.

女性参政権が付与されて久しい「ジャズ」の時代になっても、「カラードのセリーナ」が救済される途は「ホスト国」になかったことがわかる。リースは、*VD* から時を経て、「ジャズ」で再び主人公にサフラジェットの振る舞いをさせた。女たちの怒りと抵抗の表明として描かれた行為は、たしかに作品への印象を高める効果がある。同時に、サフラジェットの記憶を呼び覚ますことで、女性参政権運動とその担い手たちにとって、アンナやセリーナが、はじめから運動の「大義」の対象ではなかったということを、読者に確認させる意図がリースにあったのではないだろうか。

おわりに――「リースのフェミニズム」のありか

リースの物語に描かれたサフラジェットの姿をとおして、主人公たちが生きた時代の「女性史」を考察してきた。リースは、「ジャズ」における「人種暴動」と同じく、サフラジェットや女性運動に一切触れることなく、社会から排除される女たちの物語を描いた。女性運動は、ホロウェイ刑務所にいたような「女性の医者」や「女性の刑務所長」を生み出したが、アンナやセリーナを救済するには至らなかった。しかし他方で、そのことを十分わかっていながら、それでもなお白人サフラジェットの姿を書かずにはいられなかった「リースのフェミニズム」がある。1961 年秋、リースは当時の担当編集者に、近況を知らせる手紙を書いている。

> チェリトンフィッツペインに住んでいるテレビ作家が創作に行き詰っているらしいと、隣人が、私にわざわざ教えにやって来ました。[58] でも、彼には、日常のことをしてくれる献身的な妻がいて、しんどくなるとコーヒーをいれてくれるというのです。だから私は彼に同情なんてしません。[59]

相変わらずの貧困生活のなか、夫マックスの看病に明け暮れながら、70 歳を越えたリースが、作家人生の集大成としていた *Wide Sargasso Sea* 完成にむけて進まない筆と格闘していた頃である。リースは、「女性」を一括りでとらえることを諌めるような、複雑な属性を持つ女たちの物語を描いた。しかし同時に、リースは、「女性」と「男性」の置かれた状況が異なるということに敏感な作家でもあった。イギリス白人女性による女性運動の限界を「本国イギリス」で知り尽くし、晩年には「ウーマン・リブ」への不信感を口にしたにもかかわらず、「リースのフェミニズム」は、もはや「無意識なフェミニズム」ではなかったのである。

（本研究は JSPS 科研費（課題番号 26570017）の助成を受けた）

(58) Cheriton Fitz Paine は、*Wide Sargasso Sea* 執筆に専念するための場所を求めた末、兄エドワードの仲介で転居してきたデヴォン州の寒村。評伝でアンジェは、「ジャーナリストも行き着けないような場所」と書いている。Angier (1990), *op. cit.*, p. 482.

(59) Rhys, *Letters*, pp. 206-207 (To Francis Wyndham, October 17th, 1961).